東南アジア研究　35巻3号　1997年12月

雲南の森林史（I）
——中甸盆地の神山——

阿　部　健　一*

Forest History in Yunnan, China (I): Tibetan God-Mountain and Its Protected Forest in Jungden

Ken-ichi ABE*

The Jungden basin, situated in the high mountain area of northwestern Yunnan Province, has a predominantly Tibetan population who live mainly by animal husbandry and dry farming. Although the Tibetans have traditionally used forest resources to a limited degree, for fuel, construction and fodder, the forest around the basin, originally high mountain conifer forest, has been almost completely degraded to shrub or grassland as the result of forest exploitation that began in the 1970s.

Today, the only blocks of forest that remain unexploited are those dedicated to the mountain god "Gshi-bdag," a local tutelary deity. Each hamlet in the basin has at least one "Gshi-bdag" forest which is left uncut, since people believe that disturbance of these forests will invite disaster, such as death of people or domestic animals.

God-mountain forests and the associated beliefs are observed among not only Tibetan but also Han and Tai peoples in southern Yunnan. These patches of forest appear as oases in a desert of denudation. Here, I discuss the ethos or attitudes of people that keep part of the forest untouched.

I　はじめに

この小論とひきつづく別の小論では，雲南省の二つの盆地を取り上げ，盆地斜面の植生の変遷について記述する。その記述を通して雲南の人為による植生の変遷の過程，森林史を明らかにすることが目的である。

植生の人為的変遷，すなわち森林破壊の歴史は，雲南の景観のそこかしこに刻み込まれている。雲南は，かつては植物資源の宝庫としてプラント・ハンター達の憧れの地であり，今日も「森林王国」と称されているが，現実には中国の他の地域と同じく，森林の豊かさよりも森林が徹底的に利用された姿が目につく地域である。

* 国立民族学博物館地域研究企画交流センター；The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 10-1, Banpaku Kinen Koen, Suita, Osaka 565, Japan

中国全体でどれほど森林が破壊しつくされてきたかについてはすでに多くの報告がある。表1にその一つを示している。

雲南省は同じ表からわかるように中国の中では比較的森林の残っているところともいえる。しかし近年の森林破壊は加速度的であり，森林の消失は気候にまで影響を及ぼすほどになっている。1470年から1950年にかけて平均9.6年に一度であった干魃が1950年から1978年にかけては平均3.2年に一度の頻度で起こるようになったという報告もある。

森林破壊はとくに盆地の周辺で著しい。雲南省の盆地は，面積的にはわずか6％を占めるに過ぎず，大部分は山地・高原地域である。しかし逆に人口はこの山地・高原の中に散在する盆地に集中している。盆地底は肥沃で，穀物を中心とした定着農業の適地である。この土地生産

表1　中国各省の森林被覆率の変遷

省・自治区・直轄市	1950s	1960s	1970s	1981	1990
北京				8.1	8.1[b]
上海				1.3	1.3[b]
天津				2.6	2.6[b]
河北				9.0	15.04
山西				21.7	24.2
内蒙古				11.9	14.1
遼寧				25.1	37.8
吉林				32.2	36.0
黒龍江				33.6	37.5
陝西				5.2	17.0
甘粛				3.9	7.94
寧夏				1.4	5.99
青海				0.3	0.26
新彊				0.7	2.5
山東				5.9	17.0
江蘇				3.2	8.5
安徽				13.0	20.1[d]
浙江				33.7	42.6
江西				32.8	35.9
西蔵				5.1	5.0[c]
福建				37.0	43.2
台湾				55.1	55.1[b]
河南				8.5	14.8
湖北				20.3	15.04
湖南				32.5	34.3
広東				27.7	48.9
海南	25-35			7-10	29.9[a]
広西				22.0	22.0
四川	19-20		13.3	12.0	19.17
貴州				13.1	12.6
雲南	55-60		25-30	24.0	24.38
西蔵				5.1	5.0[c]

出所：[Edmonds 1994]
注：[a]1986. [b]1987. [c]1988. [d]1989.

性の潜在的高さが，伝統的な農業社会では，人口密度と強く相関することは特に説明は必要ないだろう。農地の拡大，建築材や燃材の消費など人間活動の影響が最も顕著に現れるのは人口の集中する盆地の周辺域となる。

さらに，盆地の人間活動はその周辺域にとどまらず，盆地と生態的に対照をなす山地の植生にも影響を及ぼしている。人口稠密な盆地は資源収奪の場である。強烈な引力で，盆地は山地の森林まで収奪する。このため山地の森林史は，かなりの部分盆地の森林史に影響されることになる。盆地の周辺域の植生の変化は，山地も含めた雲南における人と森林の関係の基本構造を端的に示し，雲南の森林史の大きな流れを表すと思われる。雲南の森林史を試みるにあたって盆地とその周辺域に着目するのは，こうした理由による。

今回記述の対象としたのは，中甸盆地と弥渡盆地である。盆地斜面の原植生は森林であるが，どちらも森林破壊と草原化が著しく進行している。原植生はほとんど残っておらず，斜面の一部は裸地となり土壌侵食が起こっているところもある。人間活動の影響を強く受け続け，周囲の森林資源を収奪してきた点で，この二つの盆地は，盆地のもつ本来的特質を同じようにその植生景観に呈示している。

しかしながら二つの盆地の景観には，明確に異なる部分もみられる。自然条件の違いもあるが，人為を強く受けた植生景観を左右するのはそこに住まう人々の生活・生産様式である。中甸はチベット人，弥渡は漢民族の盆地である。二つの「民族」の環境との関係性をとくに表徴しつつ，盆地の森林史を描出してみたい。

II　中甸盆地の概要

雲南省の地形は全体的に北西部の標高が高く，南東部が低くなっている。北西部は，チベット高原の東端にあたりメコン，イラワジ，揚子江などの大河の最上流部が集中する。中甸盆地が位置するのはこの雲南省北西部，標高3,200m の地点である。行政的には，迪慶蔵族自治州の中甸県に含まれる。[1)]

中甸県は2鎮11郷から成っている。中甸盆地のほとんどは大中甸郷に含まれる。住人の大部分がチベット族である。大中甸郷総人口13,244人のうち，13,110人，99%がチベット族である。中甸県全体をとってもチベット族が優占民族で，41.2%，ついで漢民族，納西族，傈僳族，彝族がそれぞれ22.0%，17.7%，7.4%，6.3%を占めている。おおよそ，漢民族は県城など都市部に集中し，納西族は比較的緩やかな斜面（坝地）に棚田をつくり，傈僳族・彝族は山地部の傾斜地で焼き畑を行うという具合に，それぞれの居住・生活空間を違えている。1991年

1）この自治州には，ほかに北に徳欽県，西に維西納西族自治県がある。州全体で，耕地のしめる割合は3.0%にすぎず，次に牧草地（人工・自然）が32.8%，そのほかは林地となっている。

表2 調査地の民族構成

	漢民族	チベット族	彝族	傈僳族	納西族	その他	計
中甸県	26,833	50,350	7,688	9,050	21,630	6,577	122,108
大中甸郷	61	13,110	0	7	42	24	13,244
尼史村	6	3,150	0	3	0	4	3,163

出所：[雲南省迪慶人口普査弁公室　1991]

の人口調査の結果を表2に示している。

調査は大中甸郷の尼史村で行った。総戸数は521戸。総人口は3,163人。漢族6，回族1，白族3，リス族3の他は，すべてチベット人である。尼史村の領域は中甸盆地のほぼ全域を占めている。さらに尼史村は一つの行政村であるが，15の「社」から成っている。「社」は自然集落であり，チベット語ではyultso，東部チベットのカンバ語ではyutsoと呼ばれる。いくつかの小さな「社」（小社）が合わさり一つの「社」になった例や，逆に大きな社が分かれた例もある。一つの社の構成戸数は20～50戸と比較的揃っている。こうした「社」が盆地の中に点在している。中甸盆地の概況と尼史村の社と小社の位置は図1に示した。

III　盆地の生活と生業

チベット族の生業といえば遊牧・移牧といった家畜飼養の面がしばしば強調されるが，穀物栽培も劣らず重要である。家畜飼養は生産活動の一面に過ぎない。中甸は肥沃な盆地を生活基盤にもち，農業活動の比重はことに大きい。

農業の重要さは盆地に林立する「はざ」からうかがえる。盆地のいたるところに収穫した穀物・根菜を干す「はざ」が立っている。この「はざ」はチベット語ではlosiと呼ぶが，中甸のチベット族の間でも中国語の架（ra）と呼ぶようだ。干す作物の種類によって青稞（ハダカムギ）架，蔓菁（カブ）架などと呼ばれる。基本的には支柱となる柱を二本一組で斜めに寄せ掛け，その柱に穿った穴に横木を一本ずつ通したものである（写真1）。作物は振り分けにしてこの横木にかける。

架には二つのタイプがある。青稞麦や小麦などの穀物を干す架は横木は3本と決められその間隔が広い。柱の地上80cmのところに切れ込みがあり，ここに1mほどの横木をはめ込み足場とする。この足場に立った時，ちょうど頭の上の高さに最初の横木がある。二番目の横木は最初の横木に立ったときの肩の高さ，同じように一番上の横木は胸の高さである。上にゆくほど横木の間隔は狭くなる。

一方，蔓菁や油菜を干す架には最初の横木の高さに水平にベランダ（cha）が付属している。蔓菁の実はここで干し，茎の部分のみを横木にかける。横木の間隔も狭く，1ツア（tsua）で等間隔に並んでいる。ツアは肘からピンと伸ばした指先までの長さである。

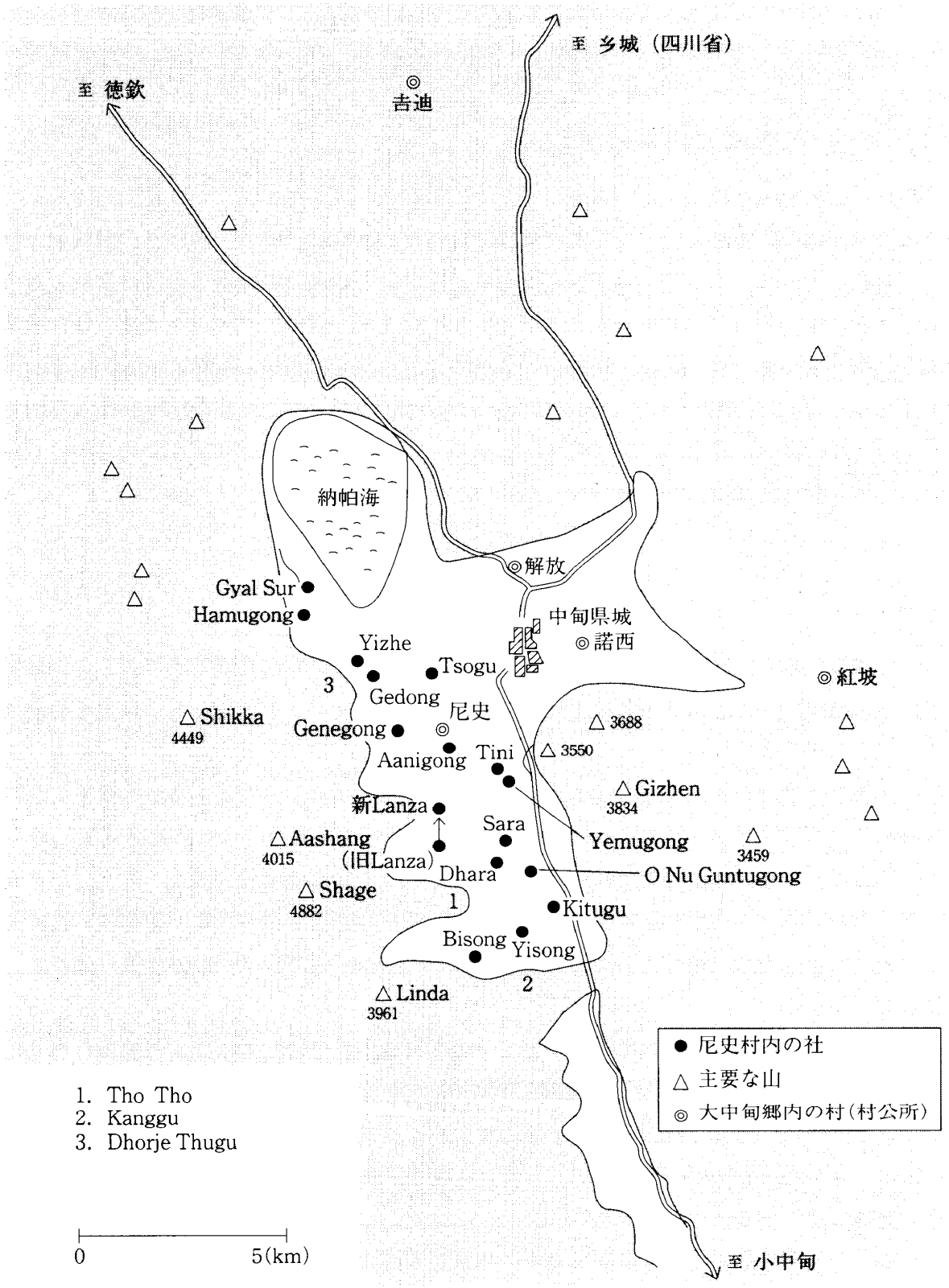

図1　中甸盆地の概要：調査社と各社に共通のシッダ

写真1　集落の近景。土塀で囲った中に架が建っている。収穫後の畑は耕起され，厩肥が点々と山積みされている。

どちらの架も柱は先端がとがっている。架の高さは5mにもなるが，高所での作業の時の握りになる。柱の間隔は4ツアと決められている。柱の間隔をとくにネッシェ（neshe）と呼ぶが，中甸盆地の人は，ネッシェの数でその家の裕福さをはかる。

家の裕福さは，ほかに家屋の柱の間隔数でもはかる。中甸の家屋の正面には屋根を支える柱（ka）がむき出して等間隔に並んでいるのが見える。この柱の間隔はガミック（gamic）と呼ばれ長さは11ツアと決められているが，ガミックがいくつあるかも裕福さの指標となる。ふつう3ないし4である。

この中甸の家屋は城のように立派である。ゆうに15m四方はある。三層になっており，人の生活するのは真ん中である。正面中央の階段を登り出入りする。階下は家畜用である。いくつかに仕切られており，豚用，黄牛あるいは犏牛（ヤクと黄牛の雑種），馬用と分けて入れられている。中甸の家屋は基本構造は平頂であるが，雨が多いため板屋根を載せている。中甸盆地周辺のみで見られ，河谷を少し下がった乾燥するところでは平頂のままである。この屋根裏は飼料の貯蔵庫となっている。油菜，ソバ，蔓菁の葉を乾燥させたものや，禾本科の草が積んである。

家の前は3mほどの高さの土塀で囲った前庭（gora）である。家屋の敷地面積と同じくらい広い。土壁に沿って薪が積み上げられている。また冬前には刈り敷きのためのカシ類の枝葉も積まれる。前庭に敷きつめ，豚を放ち厩肥をつくる。

家屋の後方あるいは横には低い2mほどの土壁で囲った空間がある。架を立てておく場所（yura）である。また家屋と少し離れたところにやはり低い土壁で囲まれた空間を持つ家もある。冬にヤクとか犏牛を入れておく場所（shoora）である。

尼史村で栽培される主な作物は，青稞麦，小麦，蔓菁，油菜，ソバ，燕麦，ジャガイモなどである。その中でとりわけ重要なのは青稞麦である。主食として特別な地位にあり，古くから栽培されている。小麦は青稞麦に代わる作物であり，耐寒性の新品種が8年前に導入され栽培が拡大している。油菜も3～4年前に導入されたばかりである。油菜は自家消費用ではなく，

食用油を採り販売するためのものであるが，チベット人の日常食でも菜種油を使うことが多くなってきている。商品作物としては，ジャガイモが重要である。昆明から米を積んだトラックがやってきてここでジャガイモと交換して帰る。1996年の場合，ジャガイモ20kgにつき米1kgと交換している。同時期昆明まで運べば，15～17kgで米1kgと交換できるため，中甸盆地の人の中にも中古のトラックを購入し直接昆明で取り引きする人も現れてきた。ジャガイモよりも油菜のほうが儲けがよいらしいが，標高の高い中甸では油菜はまだそれほど広く栽培されていない。蔓菁・燕麦はもっぱら家畜の飼料用として栽培される。

青稞麦と小麦は陰暦で1月下旬に播種する。油菜と燕麦も同じころ。そのあと4月になるとまずジャガイモ，中旬に蔓菁を植え付ける。最後はソバで5月に入ってから播種することもある。

尼史村では一人当たり2.8畝の耕地が分配されている。全国平均は，1985年の統計であるが，一人当たり1.91畝にすぎない。大家族で20畝以上を保有する農家もある。それに各集落ごとに共有の草地がある。一人当たりの耕地面積は広いが，盆地全体を見渡すと耕作されているのは3分の1くらいで，残りは草地である。

共有の草地とは別に各戸それぞれ採草場（tsara）を持っている。この草場には家畜を入れず，夏の終わりに禾本科の草（tsa）を刈り取り冬の飼料とする。

中甸県では，一戸平均，大型家畜が6.48頭，山羊・羊が4.66頭，豚が6.40頭飼育されている(1990年の統計)。ただし中甸盆地に限れば山羊は飼育されておらず，全部羊である。多い家は17～18頭飼育している。山羊は乾燥のきつい河谷の集落で飼育される。

大型家畜とはヤク，犏牛，黄牛，馬のことである。尼史村では1家族当たりこの大型家畜を8～15頭飼育している。

犏牛は，病気に強く，粗食・重労働に耐え，雌は乳産出量が多いため，中甸盆地では好んで飼育される。雄の犏牛は役畜としてスキを牽いたり，山から材木を運び出すときに使われる。

4月の中旬，男たちはそれぞれヤク，犏牛を連れて盆地の後背の山に向かう。夏の間，山間の放牧地（gura）に放ち，採乳，バター・チーズをつくる。女性が参加することもある。10日に一度ほど生産した乳製品をもって馬で盆地に戻る。そして山へは食糧を持ち帰る。

夏営地は盆地から一日の行程である。連れて行くヤク，犏牛が弱いときには1日半かかる。各社ごとに夏営地はきまっており，たとえばAanigong社はTini社，Lanza社とともにエイティティ，チェングー，ニャーロンという3カ所の放牧地をもっている。

黄牛や羊は夏の間も盆地に残る。盆地の共有の草地に放つ。草は食べられ短くなっているが，その中に有毒の大狼毒草（*Euphorbia nematocypa*）が残されている。夏には黄色いユーホルビア独特の花をさかせ，秋には真っ赤に紅葉し盆地を彩る草だが，牧草地としては消耗した現れでもある。豚が餌をあさるのもこの盆地の草地である。豚を追うのは女性や子供，年寄りの

仕事である。

夏の間の作業は，盆地に残る家畜の世話のほか，畑での除草が中心になる。先のとがった三角形の刃の手クワ（nure）を使う。ジャガイモの土寄せにもこの手クワを使う。雑草は飼料となるため捨てずにモッコにいれ持ち帰る。

ジャガイモはスキとクワで中耕する。植え付けてから40日後とさらに1カ月後の二回。雄の犏牛二頭立てのスキである。鼻面に縄で1.2mほどの木の棒を結び，引き綱とする。子供が綱をひき先導し，父親が後ろでスキを操作する。

収穫作業はまずソバと油菜から始まる。8月にはすでに収穫を終えている。ソバは霜が降るとダメになる。この間に燕麦を刈る。飼料用なので青刈りである。ついで青稞麦が8月半ば，小麦の収穫は10日ほど遅れる。蔓菁は9月上旬，霜が降りてからである。8月からは収穫作業の連続となる。

収穫の終った畑はできるだけ早く耕起する。耕起直後の土はふわふわで歩くと土埃が舞う。そこに厩肥を山積みしてゆく。春に鋤き込むまで，厩肥は次々つくられ，耕地に積まれてゆく。土はきわめて大事にされている。

蔓菁の収穫作業がほぼ終わると同時に，山の夏営地から男たちが降りてくる（写真2）。先頭は雄のヤク4～5頭で，バター・チーズをつくる桶，水桶，テント，鉄鍋を積んでいる。それに犏牛，雌のヤク，子牛が続く。先頭のヤクのカウベルが山のあちこちから聞こえてくる。

中甸盆地が最も賑やかで活気にあふれるのがこのときである。冬の準備も急がなければならない。山から下りてきた人も，刈り跡にヤクを放つと，休む間もなく刈り敷き集めにでる。薪集めと並んで，この時期の最も大切な作業となる。刈り敷き集めは夏から秋にかけても間断なく行われるが舎飼いされる家畜の多くなる冬には大量に必要となる。冬の間，牛舎（songkong）に入れるのは犏牛と黄牛でヤクは舎外である。

写真2　9月上旬。夏営地からヤク，犏牛を連れて男たちが戻ってくる。

写真3　初冬の晴天の日には，周囲の山から丸太を盆地に運び込むグループを頻繁に見かける。

刈り敷き集めは一家総出の作業である。三輪の木製の牛車が昔は使われていたが今ではトラクターである。刈り敷きに使われるのは，*Quercus monimotricha* や *Q. pannosa* などの硬葉カシの類である。

家の脇には，長さ7～10m，大きいもので直径50cmほどの丸太や，粗く挽いた角材が置いてある。家の増築や，架に使う材である。郷村官所と森林局に申請すれば自由に伐採できる。自家用に使う限り制限はない。販売は一人につき0.1m³のみ許可されている。雲杉で1m³あたり100元で販売できる。初冬の男の仕事はこうした木の伐採と運材である。

集落から半日ほど歩けば，雲杉の森林につく。厚手のフェルトの毛布を持ち，2～3人連れで2週間ほど泊まり込みでかける。幹が凍り斧での伐採が困難になる前に行う。一日かけて木材落とし（dawa）で斜面を落とし，そこからさらに一日かけて犏牛二頭立てで集落まで引いてくる（写真3）。盆地の斜面には何本も丸太材を運びこむ道筋が傷跡のように刻まれている。この道（na lon）は山の放牧地にヤクや犏牛を連れてゆく道でもある。

一連の作業が終わる頃最初の雪が降る。最後のジャガイモの収穫も終わっている。雪の中でもヤクは盆地に放たれる。その中を老婆が歩いているのが見える。ヤクの糞を拾い歩いている。肥料にするのだが，柳枝で編んだ柄つきのザルに片足で糞をのせ，背中のモッコに次々放り入れている。

IV　盆地の植生

盆地を取り囲む山々には雲南省の他地域に比べはるかに材積の大きな森林が残っている。特に四川省との境界域の標高3,200～3,600mあたりは集落もほとんどなく，やや高いところには広大な雲杉の純林，低い斜面には高山松（*Pinus densata*）の森林が広がる。また谷部にはブナ科（川滇高山櫟 *Quercus aquifolioides*，黄背櫟 *Q. pannosa*，長穂高山櫟 *Q. longispica*）の高木からなる森林がみられる。周辺地域には森林資源は豊富である。

一方で中甸盆地に面した山の斜面にはほとんど森林はみられない。背丈の低い矮性の灌木林となっている。

硬葉カシの一種 *Quercus monimotricha* の背の低い茂みがパッチ状に分布するのが特に目立つ。時には斜面一面が膝上までの高さの低い茂みに覆われていることもある。斜面の高いところには *Sabina squamata* のパッチがみられる。樹高の低いシャクナゲ類（*Rhododendron cephhalantum* や *R. phaeochrysum* など）がやはり小さなブッシュとなって点在する。5月頃からシャクナゲの花が斜面を彩る。高山松が高さ2mほどに成長しているところもあるが，大部分がブッシュであり，中高木はほとんどない。

斜面の林がここまでになったのはどういうことだろう。

前節で中甸盆地のチベット族の生活のあらましをみた。森林に直接関わるのは刈り敷き集めと建築材，燃材への利用である。漢民族は斜面の森林を切り拓いて耕地化することもあるが，中甸の盆地にはそのような動きはまったくない。森林利用はこの３つに限られる。

刈り敷きは，量的に目立ち，森林への影響が大きいようだが，木を切り倒さない限り枝葉は年々再生するため，それほどでない。また家の脇に野積みしてある建築材も目をひくが，毎年それだけの量を切り倒すわけではない。一度に多量に伐採・運び込みができないため，将来の建て替えに備えて少しずつ切り出している。またチベットの家は耐久性があり，そうそう建て替えるものでもない。木板屋根の例だと，毎年裏返すことによって20年は持つらしい。

一方燃料材としての利用は森林に与える影響が最も大きそうである。中甸では夏でも囲炉裏の火を絶やすことはない。暖をとるにも煮炊きにも燃料材は年中消費される。冬に限らず薪集めは大事な仕事である。前庭にはいつも大量の薪が蓄えてある。根っこの部分は火もちがいいとされる。直径10cm くらいの木なら根こそぎにされることもある。燃料として消費される量は無視できない。

ただチベットの人たちが生活に必要な薪を燃やしながら，長年生活しただけで盆地の斜面が裸になったとばかりは考えられない。中甸盆地からやや離れたところには，チベット族の伝統的な集落からなる小規模な盆地が点在するが，そのような盆地では中甸ほど斜面の森林破壊は見られない。

中甸盆地の森林破壊はここ30年の間のことである。斜面は高木からなる林で覆われていたらしい。その森林を伐採したのは盆地の外からの木材需要に応じてのことだ。

1972年，「建設辺彊運動」の一環として，黒龍江省，吉林省，湖南省，山東省，上海などから伐採労働者，伐採道路建設労働者がやってきたのが組織的な林業活動の始まりである。この年，中甸県小中甸和平郷に林業局が設置されたが，「建設辺彊運動」終了後，故郷に戻らずそのままこの林業局に残ったものも多い。林業局には現在3,017人が働くが2,110人がこうした外からの漢民族である。ほかは様々な少数民族の人たちであるが地元のチベット族の人はわずか176人が勤めるのみである。

年間伐採量は，1982年には15万 m^3 に達したが，その後資源管理が強化されたこともあり，最近（1995年）は伐採割り当ては2.5万 m^3 に押さえられている。当初の皆伐から1985年以降は択伐されるようになった。いまでは林地を区切り計画的な伐採が行われている。[2)]

最初は乱伐に近い伐採が行われたようだ。商品としての木材だけでなく労働者の住居建築・

2）林業局では，今では伐採活動のほか，植林活動も行っている。川西雲杉（*Picea linkiangensis var. balfouriana*）と土着雲杉（*Picea linkiangensis*），さらに紅杉（*Larix potaninii*）が植林樹種として選択されている。重点樹種は川西雲杉であり，年間約１万本の苗生産の約８割を占める。苗は，最初は農家に委託し，２年後林業局が購入，さらに２年から３年，林業局のナースリーで長さ15cm ほどに育苗し山出しする。

燃材のための伐採も行われた。一度に多くの，ほぼ尼史村の人口に匹敵する労働者が移入したのだ。商業伐採もさることながら，彼らの日々の生活のための木材需要も大きかったに違いない。その結果，中甸盆地はとくにひどく森林破壊が進むことになったと思われる。

V　シッダとその森

森林はほとんど消失しているが，盆地斜面の一部に画然と森林が残っているのをみることがある。ほかの斜面の植生が低い灌木林か草地なので，ひときわ目立ち，刈り残しのように見える（写真4）。

斜面の森林の一部が残っているのは，そこがシッダ（Gshi-bdag）の山だからである。集落の守護神，シッダのいる山として植生が残されている。シッダの林では，木を切ることはもちろん，枝を折ることも，狩りや殺生することも禁じられている。

シッダはチベット仏教でもポン教の神でもない，「土着の神」である。[3] 身近な神々，日常生活と密着したチベット族本来の神々の一つといえる。スタン［1990］は，チベット族の自然物信仰に触れ，聖なる山を「国の神（Yu-lha）」あるいは「土地の主（Gshi-bdag）」と呼ぶと記しているが，土地の主シッダはきわめて山との関わりの深い土着神である。シッダは神のことを指すが，同時に聖なる山，神山のことでありその林のことである。シッダは山と林と不離の関係にある。村人がシッダの名を口にするときは神のことでも山のことでも，そしてその林

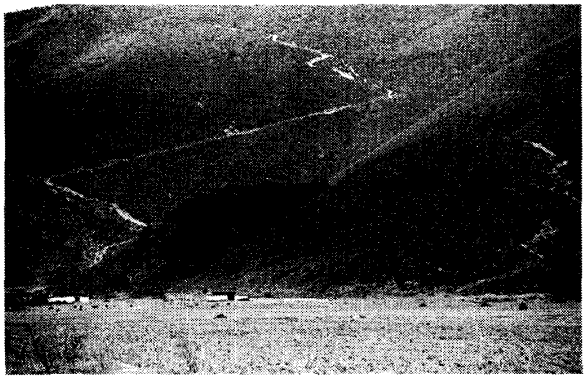

写真4　盆地の斜面。本来の森林植生はみられず，矮性の低い灌木が苔のように斜面に張りついている。その中に画然とシッダの林が残っている。斜面に刻まれているのは丸太を運んだ跡道。

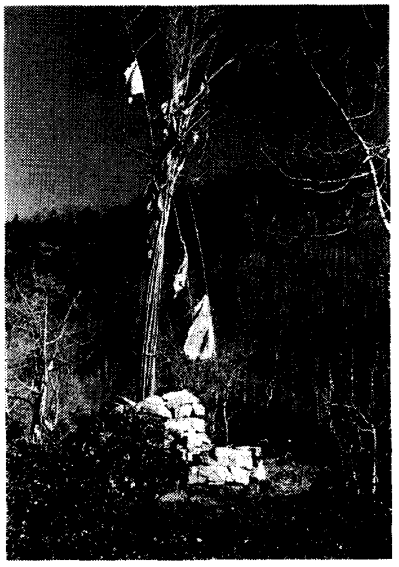

写真5　シッダの依り代。

3）自治州民族宗教事務委員会の見解によると，シッダはチベット仏教の要素の一つである。シッダは音訳で「日達」と標記され，シッダの山は「神山」とされる。

のことでもある。

シッダは，「守護神」であるが荒ぶる神の気質を持つ。ひとたびその怒りに触れると社あるいは個人に，病気や災害をもたらすと信じられている。シッダの森林は荒らしてはならない。シッダの森林が切られずに残るのはこのためである。

それぞれの社がその守護神としてそれぞれシッダをもつ。中甸盆地では，尼史村（Genegong 社の Somun）で生まれた高僧が，行き場のない魂を，この盆地の一つ一つの社（集落）の守護神として封じたと伝えられている。シッダはもともと超自然的な力をもつ人が，「成仏」しきれないときに転化すると信じられている。

表3に各社と小社のシッダの名前をあげている。シッダにつけた添字は，シッダが「男」山か「女」山（mori）か「僧」山（bianri）かの区別である。男のシッダには男しかゆけない。僧と女のシッダには誰でもゆける。シッダが生前，男だったか女だったかあるいは僧だったかによるというが，「生前」のシッダにまつわる話しは断片的なものが残るのみである。由来についてもそうだが，中甸盆地のシッダについては，どこか村人の記憶が途切れているところがあり，「男」山に対するチベット語の呼び名も伝わっていない。ただこのことはシッダに対する敬神の気持ちが失われていることを意味しない。敬神の思いは焚香という行為になるが，シッダへの焚香は，生活の中にしっかりと組み込まれている。それは，我々がとくに願を掛けていなくても，神社の前で手をあわせお賽銭をなげる行為と似通うものと思える。

シッダは神聖な林であるが，決して足を踏み入れることのできない「入らずの森」というわけではない。落葉や落枝の採取は許されている。刈り敷き集めは盆地の重要な農作業であったが，モッコ（loma）を背負い，木製の落葉掻き（長いものを yala，片手で扱う小型のものを yato という）を手に，松葉を集める女性の姿をシッダではよく見る。日に何度もシッダと家を行き来することもある。また，各家屋にしつらえた，香炉（bsang-thab）にくべる生葉もここからとることが多い。[4)]

チベット暦の毎月1，8，15日（2，5，10日にも供養を行うシッダもある）には，シッダの林の中の依り代（tsen phung）を訪れる。逆に9，19，29日にはシッダに行くことは禁じられている。依り代には石積みがあり木の枝がさしてあり，旗がたなびいている（写真5）。白い竈があり，ツァンパ・青稞麦・小麦・米などの穀物，バター・ミルク・酒を供え，松葉や杜松などの香りの高い木の枝葉をくべ，シッダを呼び慰撫する。

特定な日だけでなく，家族や家畜が病気になったり，不幸な出来事が続いたときもシッダで焚香を行う。知らぬうちにシッダの怒りにふれたと思うのである。なにか願い事がある時は，

4）チベット族の人の日常の宗教生活で最も大切な行為は焚香である。常に香りの高い供物で日常の神々は慰撫する必要がある。早朝に，主に松やビャクシン，カンバなど香りの高い青葉を，屋根の上や門の上，あるいは土壁の上に設置した西洋ナシ型の香炉（bsang-thab）にくべる。

表3　尼史村を構成する社及び小社とそのシッダ

社名	戸数	人数	シッダ
Bisong［柒松谷］	36	194	Linda*(B), Shage*(m)
Bisongkong			Naze(B), Baoware(B)
Kangijg			Kanggu*(B), Tangzu(B)
Yargong			Jianshe(B)
Yisong［必松］	37	209	Linda*(B), Shage*(m)
Wuguyi			Yishizadui(B)
Soyi			Dujuzaza(B)
Anugu			Kanggu*(B)
Kitugu［居都谷］	32	185	Chischang(B), Linda*, Shage*(m)
O Nu Guntugong［吾奴］	36	191	Kekong(B), Linda*(M), Shage*(m)
Yemugong［必姆］	25	138	Gizheng*(B), Shage*(m)
Ondhu			Lujing(B)
Aajigong			Guigzheug(B)
Imu Kunsa			Chezhong(B)
Dhara［达拉］	54	309	Tho Tho*(B), Shage*(m)
Dhara			Jaku(M), Tho Tho*
Tegolong			Tegolong(B)
Sara［擦拉］	23	112	Gizhen(B)*, Linda*(B), Shage*(m)
Lanza［腊咱］	27	153	Zashidudui(B), Tho Tho*(M), Aashang*
Tini［程尼］	35	206	Aashang*(B), Gizhen*
Tini			Tho Tho*(M), Gizhen*(B)
Aatokagui			Banri(B)
Aanigong［阿能］	46	264	Aashang*(B)
Genegong［吉能］	37	239	
Genegong			Kedeug(B)
Somun			Aashang*
Yijugong			Dougke
Tsogu［从古］	21	113	Zogu, Aashang*
Yizhe［必这］	38	228	Dhorje Thugu*(m)
Gedong［格東］	45	262	Dhorje Thugu*(m)
Hamugong［哈木］	35	212	Tsoji(M)
Gyal Sur［角所］	38	269	Dhorje Palden(B)
合計	565	3,284	

注：戸数・人数は聞きとりによるもの。人数は表2と若干異なる。
　［　］中国語標記
　*他社と共通のシッダ。図1に位置を示してある。
　(B)「僧」のシッダ (Bianri)
　(M)「女」のシッダ (Mori)
　(m)「男」のシッダ

そのつど焚香に訪れる。毎日行くという人もいる。

依り代は普通頂上にあるが，農繁期には，シッダの林の前の小さな丘（phi）で簡単に焚香を済ませることもある。依り代が高く遠いDhorje Thuguシッダなどは，集落の近くに小さな代用の依り代を常設していることもある。クワリというシッダの代替林もある。集落が移動した時には，もともとのシッダが集落から見えなくなることがある。Lanza社がその例で，旧地に土砂が流れ込んだため集落全部が移転したが，あらたな集落の正面の斜面をもともとのシッ

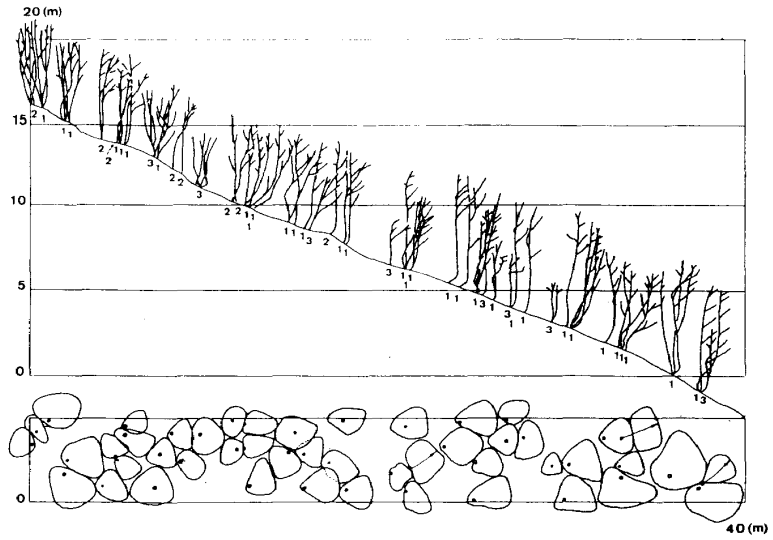

図 2-a　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Zashidudui の代替林：北斜面

注：図中の数字・記号は以下の樹種を示している。

1	*Betula albo-sinensis*	2	*Betula platyphylla*	3	*Berberis dictyophylla*
4	*Picea linkiangensis*	5	*Quercus pannosa*	6	*Pinus densata*
7	*Rhododendron vernicosum*	8	*Larix potaninii*	9	*Rhododendron dryophyllum*
X	*Malus rockii*				

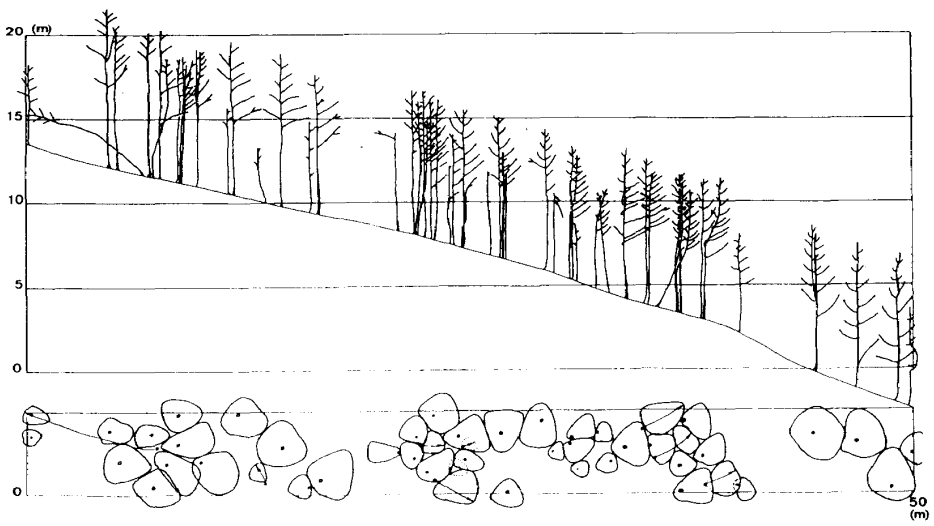

図 2-b　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Zashidudui の代替林：南斜面
注：図中の樹種はすべて 6 *Pinus densata* である。

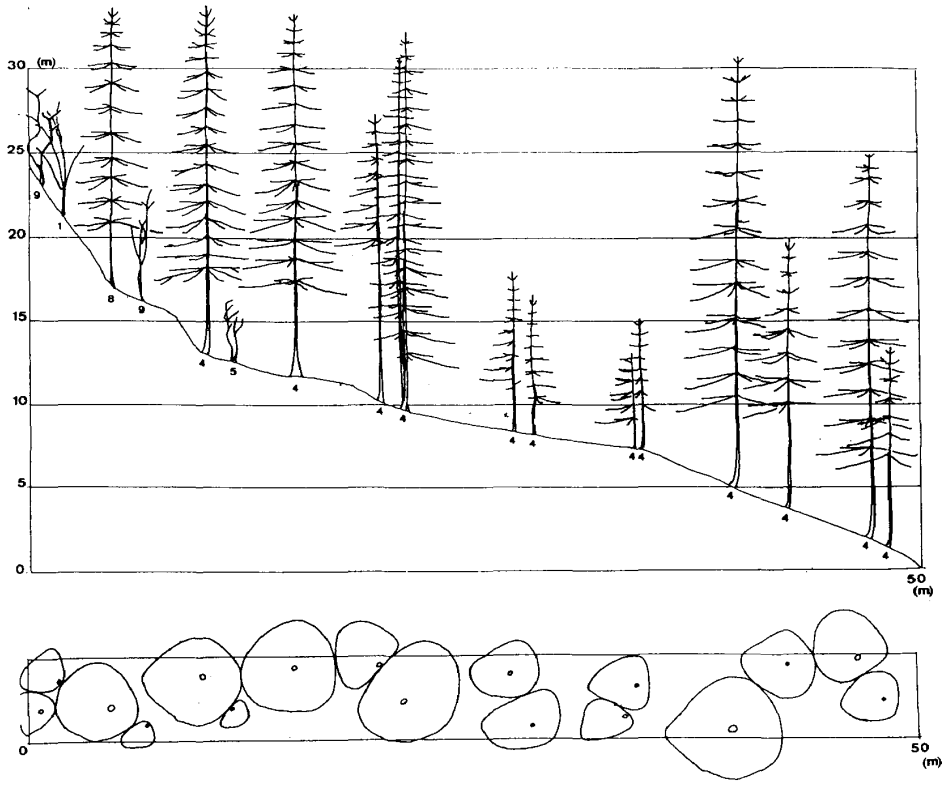

図 2-c　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Dhorje Thugu

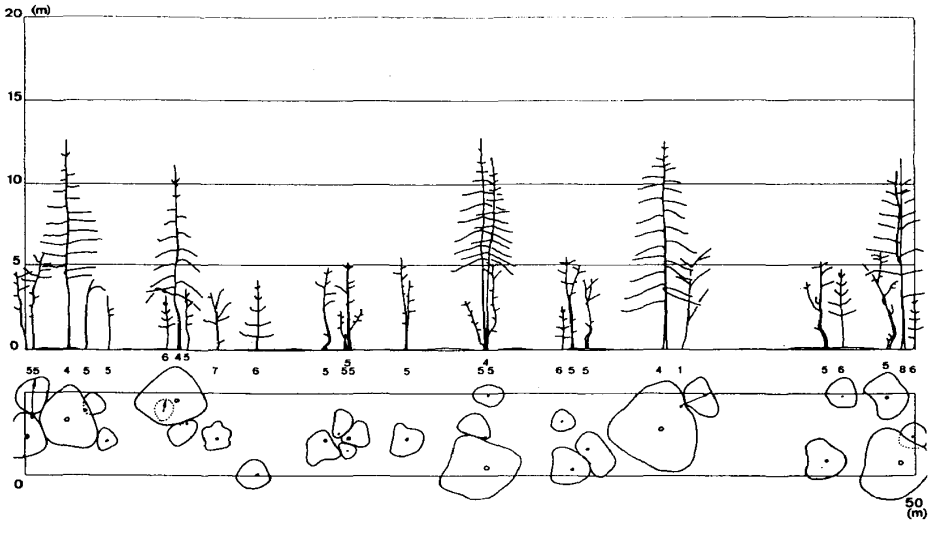

図 2-d　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Tho Tho：下部

図 2-e　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Tho Tho：上部

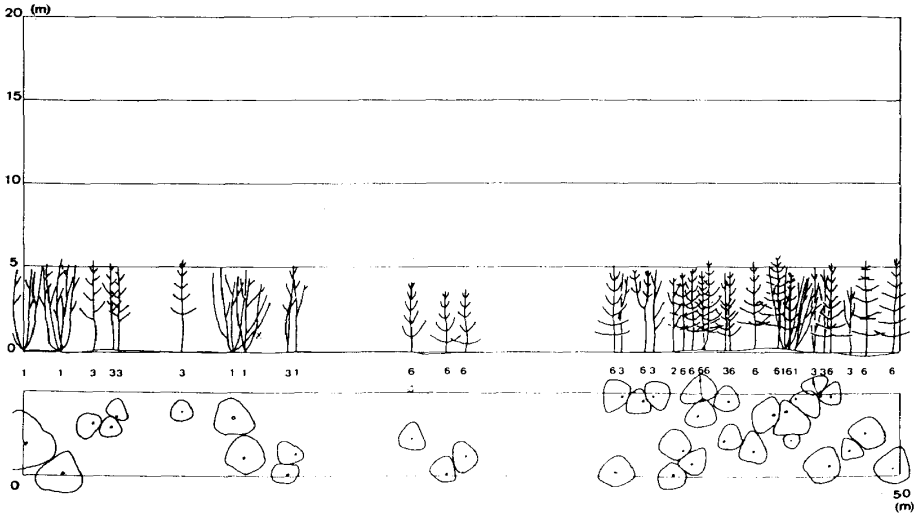

図 2-f　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Zashidudui

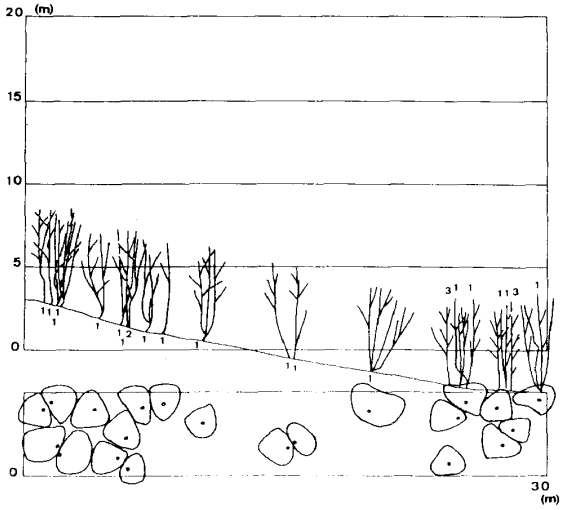

図 2-g　樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラム
Tegolong

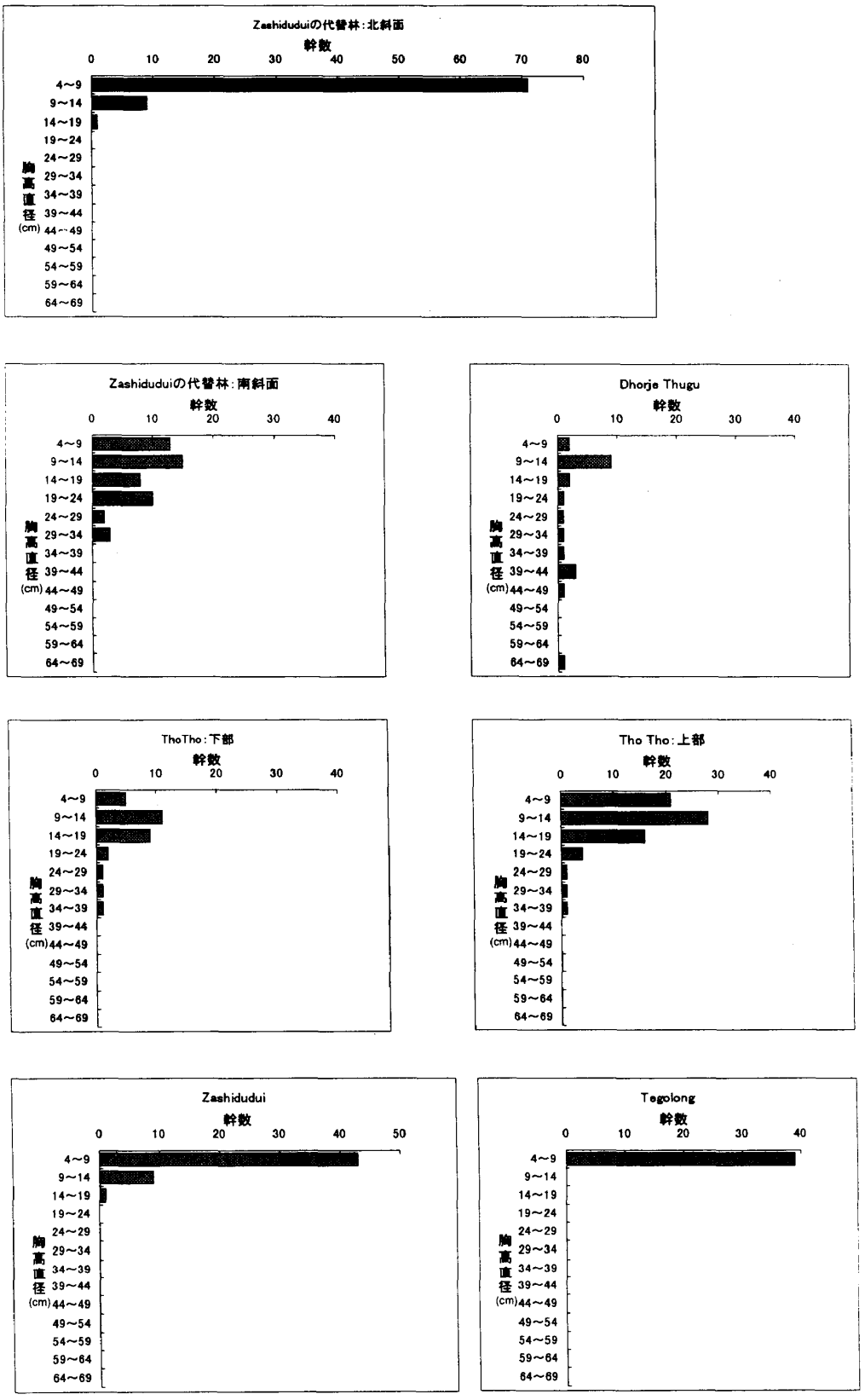

図3　シッダの林の胸高直径分布

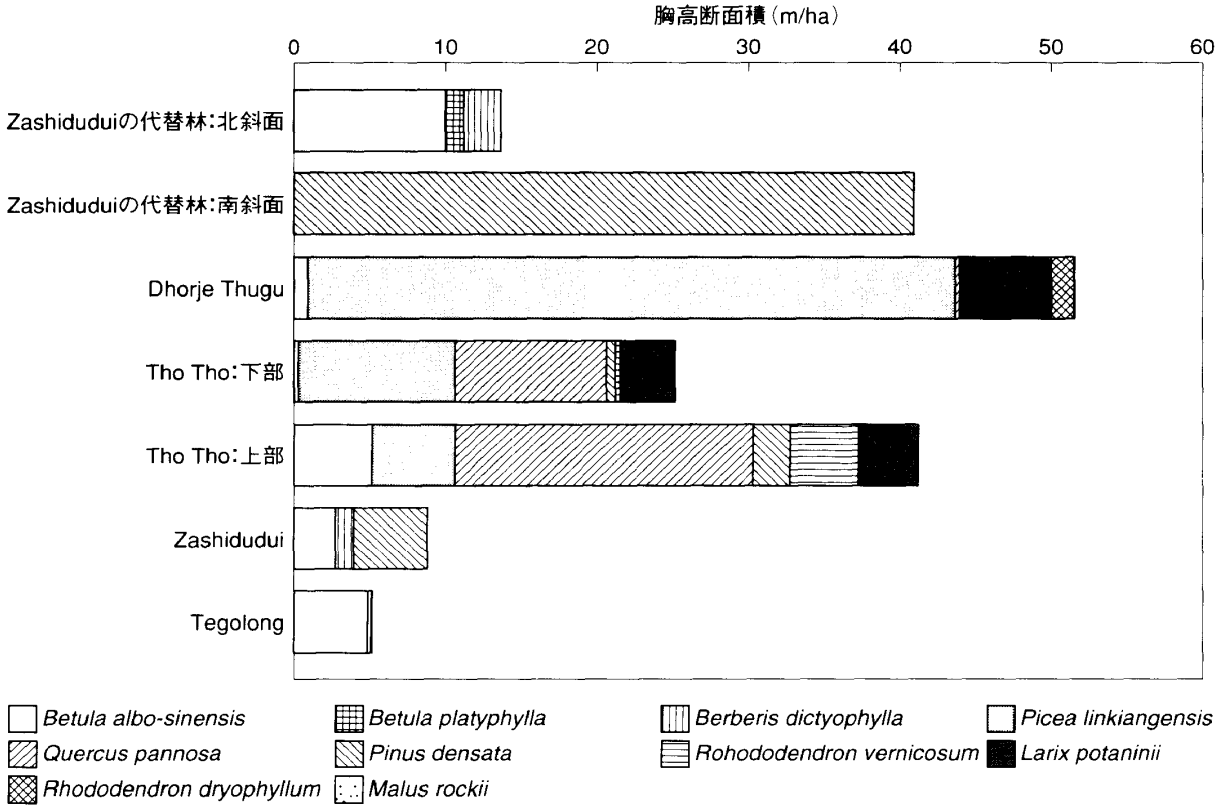

図4　各シッダの胸高断面積

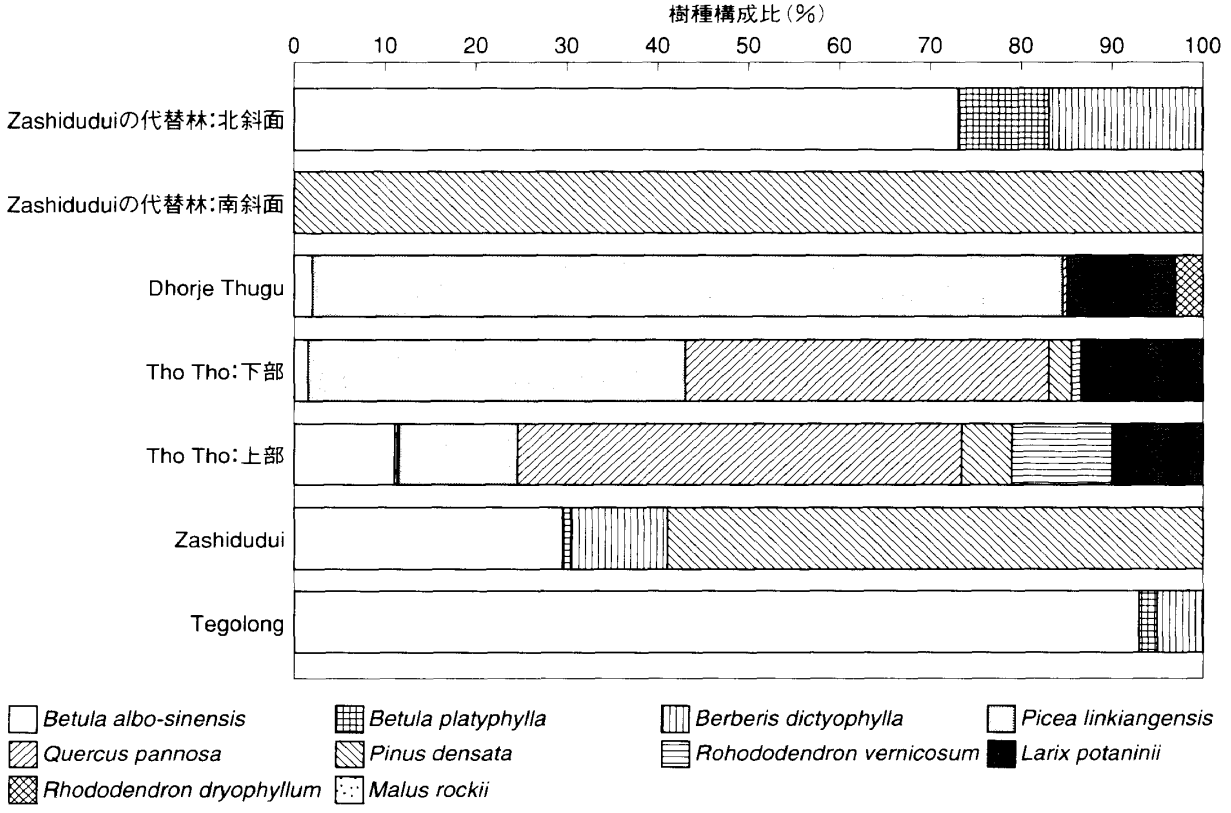

図5　各シッダの胸高断面積による樹種構成比

写真6　Zashidudui シッダのクワリ（代替林）。斜面の向きで樹種構成ががらりと変わる。北斜面はカンバ類の落葉樹林，南斜面は松林。松林の下側には矮性の *Quercus monimotricha* の茂みが点在する。

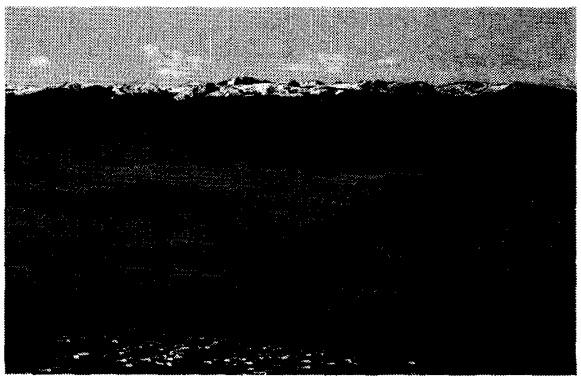

写真7　盆地の遠景。前山に続く山地とその背後の雪山。

ダ Zashidudui の代理の林として扱うようになっている。便宜的なしくみであるが，シッダへの焚香が儀礼的・表面的でなく，日常生活にしっかりと組み込まれた行為であることを示している。

このシッダの林の様相を明らかにするために，いくつかのシッダを選びトランセクト・プロットを設定，プロット内の胸高直径4cm以上の全樹木について，胸高直径，樹高を測り，樹冠投影図とプロファイル・ダイアグラムを描いた（図2-a～g）。トランセクトは幅は5mと決めたが，長さは30mから100mと長短ができた。プロット内の樹種の多様さによって林相を表すのに十分と思われる長さを設定したためである。

プロットを設けたシッダは，林相が代表的・典型的と思われるものを選んだ。必要に応じて一つのシッダで複数のプロットを設定したケースもある。この標高ではわずかな斜面の向きの違いによって林相がまったく異なることがあるからである。

プロットを設定したのは，Zashidudui シッダとそのクワリ，Dhorje Thugu シッダ，Tho Tho シッダ，Tegolong シッダである。

各シッダの胸高直径の分布は図3に挙げている。直径9cm以下の個体が密に生える二次林的な森林や，まばらではあるが大木の点々とする原生林に比較的近い森林まで，森林景観にはばらつきが見られる。図4は胸高直径断面積を樹種ごとに示した。Tegolong や Zashidudui, Zashidudui の代替林の北斜面などは個体数は多いが薄い森林といえる。樹種構成の違いをより明確にするため図5では胸高直径断面積をもとに各シッダの樹種構成比を示してみた。Zashidudui の代替林で明瞭に示されるように，斜面の向きの違いで樹種はがらりとかわる。湿った北斜面はカンバ類からなる植生であり，日当たりがよく乾燥した南斜面は松が優占する（写真6）。

VI　神の山と盆地

焚香の日の朝には盆地の周囲のあちこちから白い煙がまっすぐ立ち昇るのが見える。白煙は濃青の高い空にとけ込み，中空で何者かが煙を食べたかのように霧散する。シッダの別名は「煙を食べるもの」である。中甸盆地の植生景観の特徴は，盆地を守護するシッダへの敬神の想いから斜面の一部に森林が残されることである。

チベットの人が持つ宗教観は仏教と極めて親和性が高く，彼らが伝統的に崇拝する土着の神々は，歴史的に抵抗なく外来の仏教の神へと習合されていった。しかし多くは完全に仏教の神となることはなく，日常生活に極めて近いところでとどまった。仏教の神々が「霊界の神々」('jig rten las 'das pa）であるのに対して，伝統的な神々は「日常世界の神々」('jig rten pa）として異なる世界の神とする［Tucci 1980］。ポン教ついで仏教を「神の宗教」と呼び，土着の神々への信仰を「人間の宗教」と呼ぶこともある［スタン 1990］。

シッダへの敬神と焚香の行いは，この日常世界の神々に対した，ごく身近なものである。僧院に入り教義を学ぶものでなく，日常生活の中で感覚的に身についていくものといえる。シッダはまさに「日常世界の神」であるが，盆地の底で生活する人々が，日々目に留める山々に対し畏敬の念を抱くのはごく自然と思える。

表3に示したように，一つの社で複数のシッダを持つ。小社が合わさった時にそのシッダを併せてとりこむのである。また逆にいくつかの社で共通のシッダを持つこともある。一つの社が分かれてそれぞれ独立した社になった時におこりうる。Yizhe 社と Gedong 社はかつて Bulan 社として一つであったが，1983年に分割された。シッダは今も共通で Dhorje Thugu である。Gizhen シッダと Tho Tho シッダを共通に持つ社もかつては縁の深かった社と考えられる。複数の社にまたがるシッダではあるが，それぞれの社では自分たちだけのシッダと認めている。ただ複数の社のシッダとなるだけあって，他のシッダに比べると高くその森は広い。

これとは別に「共通」のシッダもある。「地域のシッダ」ともいえるが，盆地の南側の地域では Linda と Shage シッダ，北側の地域では Aashang シッダがこれにあたる。さらに盆地全体を守護するシッダもある。Shikka シッダである。Shikka シッダは中甸盆地を囲む山の中でひときわ壮麗な山である。地域のシッダはいずれも高山であり，日常的に訪ね焚香を行うわけではない。この点が社のシッダと異なっている。

このシッダの重なりを図6に示した。また先の図1ではいくつかの社に共通するシッダの位置も表している。盆地は，まず前山，次にやや高い山，そしてその奥の雪山と山々に幾重にも取り囲まれている（写真7）。同じ構図で中甸盆地の人は，社のシッダ，地域のシッダ，盆地全体のシッダ，とシッダに幾重にも庇護されていることがわかる。中甸盆地の人々は，日々の

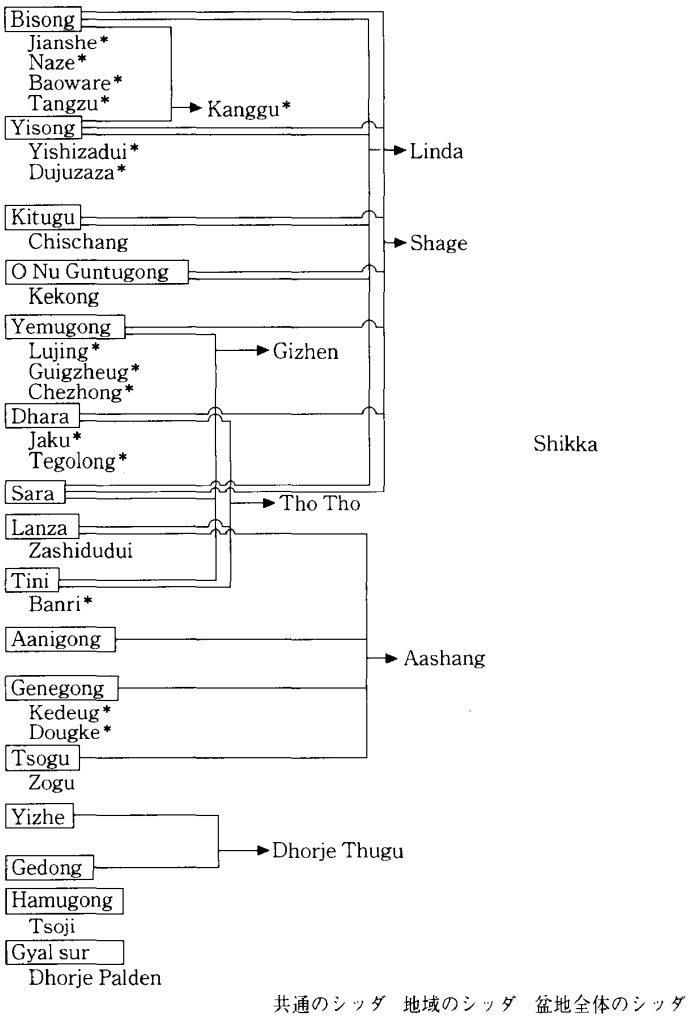

図6　尼史村のシッダの重層性
＊小社のシッダ
□社

生活の安寧をシッダに願い，ほとんど森林の消失した盆地の斜面の一画にシッダの森林を残すことになった。

同様の構図は雲南のほかの盆地でもみられる。

たとえばタイ族が住む雲南南部の西双版納や瑞璃地区の盆地にも斜面の一画に同じように森林が密に残っているところがある。神山あるいは龍山とよばれる森林である。タイ族の神山についての報告は，シッダと共通するある種の自然観・宗教観を伝えていて興味深い。

斐盛基［刊行年不詳］によれば，小乗仏教に帰依する前のタイ族は，自然環境や動植物との調和を図る多神教の崇拝者であったが，その名残として神山信仰がひきつがれている。神の宿るところとして，そこに生息する動植物も神の庭の生霊とみるので，それに触れたり死者を埋葬したりすることを禁じている。毎年宗教人が祭祀儀礼を行うが，それには村人も参加し，供物を供える。神山には2種類ある。nong-man と呼ぶ神山は各村ごとにあるもので，村の近く

にあり面積が10～100ヘクタールと比較的小さい。一方，孟という旧西双版納王国時代の統合領域単位内の村々に属する神山もあり，nong-meng と呼ばれている。こちらは面積が数百～数千ヘクタールにも及ぶ。

シッダが特に宗教人を必要としない日常的な点であることをのぞけば，シッダもやはり仏教以前のチベット人の自然崇拝から生み出された神であること，社のシッダ・地域のシッダに対応する形で拡がりの異なる神山があること，なによりも聖域として森林が残されることなど共通項が見いだされる。雪山に囲まれた針葉樹林の中甸盆地と熱帯多雨林の鬱蒼と茂るタイ族の盆地，自然環境はまったく異なっているが，ひとつの相似な景観が生み出されている。民族の違いを越えて，「神山信仰」という形をとり，盆地の斜面の森林の一部は残される。

この「神山信仰」が見られるのは盆地の住民に限ったことではない。一つ雲南での例をあげれば元陽周辺の，1,000m 以上の山地の緩やかな斜面に棚田をつくるハニ族，彼らも神山をもつ。神山は Amagatso と呼ばれている。斜面に成立した集落の下には棚田が，上には Amagatso の森林がある。「神山信仰」は盆地・山地という地形的環境よりも，その民族の歴史，とくに自然・森林との関わりの歴史の密度が反映されるように思える。

盆地の斜面の消失の過程と要因について最後に触れておこう。量的な事実は示し得なかったが，直接の要因は商業伐採と，伐採労働のために移入してきた外部の人々の需要と考えられる。さきに描いた盆地の人々の伝統的な生活の延長上では，1970年代におこった急激な森林の消失は説明できない。しかしながら盆地の住人も，薪，刈り敷き，建築材と森林資源を利用してきており，穏当にいえば，中甸盆地の森林破壊は，チベットの人々と移入してきた人々の相乗作用による，といえる。

かつて盆地の斜面を裸にした林業は今日も中甸の主産業である。産業ということに関しては，尼史村の「伝統的」生活も，自給的なものでなく「産業」的なものに向けて，次第に変容してきている。「産業」とは外に向けた商品の生産のことである。ジャガイモの導入やそれを運ぶためのトラックの購入などが一つの現れである。

一つ強調しておきたいのは，林業が，外の世界から突然盆地にやってきた産業であり，なんら前史を盆地に持っていなかったことである。伝統的な世界のなかに，異化的に入り込んできたものであり決してそれと同化することはなかった。中甸盆地で営々と営まれてきた生活に，「林業」という産業世界は，直接的にはほとんど影響を及ぼすことはなかった。中甸の森林の資源化・産業化は外からきた人によってのみ実現したのである。

同質の現象は，今日の雲南の森林をめぐる様々な変化のなかに容易に読みとることができる。こうした外からの資源化の急速な動きの中で「神山」という内なる伝統世界が残してきた森林がどう取りあつかわれるのか，どのように変貌するのか気になるところである。

謝　辞

中甸盆地では，1995年9月に予備的調査，同11～12月に本調査を行った。また1997年7月には補足調査を行うことができた。いずれも文部省科学研究費補助金「人と森林世界に関する大陸間比較研究」によるものである。調査の機会を与えていただいた研究代表者，京都大学東南アジア研究センター山田勇教授にお礼申し上げる。

現地調査は，雲南民族博物館・尹紹亭副館長のご助力により実現できた。中甸盆地での調査と植物の同定には，中国科学院昆明植物研究所の楊永平，鄒澄両氏の同行・協力を得た。また迪慶蔵族自治州民族宗教事務委員会 Dakpa Kelden 氏にはシッダについての聞き取り調査に協力していただいた。植生調査は，京都大学農学研究科熱帯農学専攻の松田正彦君とともに行った。

参　考　文　献

迪慶蔵族自治州民族宗教事務委員会（編）．1994．『迪慶蔵族自治州宗教志』中国蔵学出版会．

迪慶蔵族自治州農牧局（編）．1994．『迪慶蔵族自治州畜牧志』192．雲南大学出版社．

Edmonds, Richard. 1994. *Patterns of China's Lost Harmony*. London: Routledge.

裴盛基．刊行年不詳．「西双版納傣族的伝統文化信仰対植物環境的某些影響」『西双版納民族植物学研究論文集　1982-1988』中国科学院昆明植物研究所民族植物学研究．

スタン，R. A. 1990.『チベットの文化』山口瑞鳳・定方晟（訳）．岩波書店．（原著　Stein, R. A. *La Civilisation Tibetaine*. Paris: L'Asiatheque. 1987.）

Tucci, Giuseppet. 1980. *The Religions of Tibet*. London and Henley: Routledge & Kegan Paul.

雲南森林編写委員会（編著）．1986．『雲南森林』雲南科技出版社・中国林業出版社．

雲南省迪慶人口普査弁公室．1991．『第4次人口普査手工汇总資料汇編』．

中国科学院昆明生態研究所・雲南省農業区画委員会弁公室．1994．『雲南植被生態景観』中国林業出版社．